

## テイトとモットーの飲茶詩を読む

海老澤 豊

### 序

18世紀を迎えようとする英国に一風変わった作品が現われた。『リア王』の改作で名高い桂冠詩人ネイハム・テイトが書いた『万能薬、茶に関する詩』(1700)である。この作品は滑稽味を帯びたバーレスク詩の一種と考えられ、各種の飲料を主題とした一連の模倣作、すなわちイライジャ・フェントンの『穀物酒』(1706)、ジョン・フィリップスの『林檎酒』(1708)、ジョン・ゲイの『葡萄酒』(1708)などを生み出した。(1)

ポンドは『万能薬』について「半ばは高く評価される飲料に対する称賛詩であり、半ばは疑似英雄詩」と説明する。(2) 一方でカーペンターは、この詩が「茶やコーヒーや香料など新たに入手できるようになった贅沢な輸入品を購える、洗練された都会生活を称賛する」ものだと指摘する。(3) 同様にテリーも「18世紀初頭に書かれた無数の疑似英雄詩は、消費者革命と象徴的な関係を持つ日用品に注意を向ける」と説く。(4)

本論はこのような観点に寄りかかりながら、テイトの『万能薬』を読み解く。また同じく茶を主題にした後の作品、ピーター・モットーの『茶に関する詩』(1712)、匿名の詩人による『茶、3巻からなる詩』(1743)についても目配りしたい。(5) しかしまずは1700年前後の英国における茶に関する記述を拾ってみよう。

### 1. 英国における茶の紹介

英国に初めて茶が輸入されたのは17世紀のこととされる。サミュエル・ピープスは1660年9月25日の日記に「リチャード・フォード卿はお茶(中

国の飲み物で、私はまだ飲んだことがない)を一杯持ってこさせ、帰っていった」と記していたが、1667年6月28日の日記には「馬車で帰ると、妻がお茶の用意をしていた。妻が薬種商のペリング氏から聞いた話では、お茶は妻の風邪と鼻炎に効くそうだ」とある。(6) わずか7年の間にピープス家では茶が普通にふるまわれるようになったわけである。海軍省の高官を務め、富裕であったピープスならではのことだろう。

ロンドンの商人トマス・ガーウェイ(ギャラウェイ)は1664年の広告ビラで「1657年から茶を売り始めた」と記している。極端に輸入量が少なかったために、茶は1ポンド(約450グラム)あたり6ポンドから10ポンドで販売された。ガーウェイは中国で産出される茶について、完璧な健康を老齢まで維持し、筋肉や内臓を強化し、頭痛や眩暈や憂鬱や結石などの万病を治癒するなどの効用を挙げている。(7)

一般に英国に茶を紹介したのは、1662年にチャールズ2世の妃となったポルトガル王の娘キャサリン・オヴ・ブラガンザであるとされる。宮廷詩人エドモンド・ウォラーは「王妃陛下に推奨された茶について」と題された詩を書いた。(8)

ヴィーナスは天人花、アポロは月桂樹、  
王妃が愛でたもう茶はどちらにも優る。  
我が最良の王妃と最良の植物を得たのも  
太陽が昇る美しい国への航路を示した、  
かの大胆な国(ポルトガル)のおかげで、  
その豊かな産物を我らは正当に評価する。  
詩神の友として、茶は我らの空想を助け、  
頭に侵入する、かの憂鬱を抑制する。  
あの魂の宮殿を澄んだ状態に保ち、

誕生日に王妃にご挨拶するにふさわしい。

神々と神木の関係を歌ったウェルギリウスの第 7 牧歌を模しながら、ウォラーは茶とキャサリン王妃を褒めたたえとともに、茶が詩想をもたらし、頭脳を明晰にするとその効用を歌う。

1709 年 10 月 8 日の『タトラ』第 78 号には、音楽や詩歌や政治を学びたい者は、夜の 8 時から 10 時の間にペルメルにあるスミルナ・コーヒーハウスに来れば、ボヒー茶と嗅ぎ煙草を味わうことができる。 (9) また 1711 年 3 月 12 日の『スペクテイター』第 10 号は、朝食にお茶とバターつきパンを取る家庭では、本紙をぜひとも茶道具の一部にしてほしいと訴える。また 1712 年 3 月 17 日の同紙第 328 号は「コーヒー、チョコレート、緑茶、インペリアル茶、ペコ茶、ボヒー茶は安価に思われるが、茶卓にふさわしい道具立てが加わると、想像もできないほど高い出費に跳ね上がる」と述べている。 (10) すでにこの時点で飲茶をめぐる一種の文化が生まれていることが分かる。

茶の効用を宣伝するために種々のパンフレットも書かれたが、ここではテイトが『万能薬』を書く際に参考にしたとされるペクリンとオーヴィントンの茶論に触れておこう。 (11) デンマーク王の侍医であったヨハン・ニコラス・ペクリンの『茶に関する対話』 (1684) は、茶の持つ各種の効用を以下のように記している。①驚くべき効き目のある炭酸アンモニウムを含む。②鎮静効果と薬効に富んでいる。③快い苦さと渋みによって胃と神経を強める。④水を媒介とする自然な飲料である。⑤麦芽酒のように悪くならず、酸っぱくなったり粘ついたりしない。⑥そのエキ스는頭脳や血液を刺激しないが、これは葡萄酒の欠点である。⑦体力を弱めたり、体質を消耗させたりせずに、癒す唯一の健康に良い治療薬である。⑧飲む際にむかつきを催させない唯一の飲料である。 (12)

続いてテイトの友人であり、東インド会社の船医としてインド北部のスーラトで数年を過ごした聖職者ジョン・オーヴィントンの『茶の性質と特性に関する論考』 (1699) を概略してみよう。茶にはさま

ざまな種類があるが、まず「ボヒー茶」(武夷茶) は褐色か赤みがかった色をしており、病気を癒したり予防したりする効能を持つ。次に「シングロ茶」は淡い緑色で芳香が匂いたち、三・四回湯を変えてもよく出る。最後の「ピング茶」あるいは「インペリアル茶」は鮮やかな緑色で香りも爽やかなために、英国では中国と同様に最も高価である。また茶は一般的に痛風や結石、壊血病や眩暈などに効果があり、消化を助け、頭脳を覚醒させる。人をしばしば過ちや愚行に走らせる葡萄酒よりも、茶は優れた飲料であるとオーヴィントンは説く。 (13)

これまで見てきたように、中国から輸入された茶は何よりも健康の維持、疾病の治癒と予防に効果のあるすばらしい飲料として宣伝されてきた。人を酩酊させる葡萄酒やビールとの対比で、茶の優越性が強調されることも各種の茶論に共通している。また 18 世紀初頭の英国で愛飲されたのは、紅茶ではなく緑茶であることに注意したい。次項では桂冠詩人テイトがものした茶に関する詩を取り上げる。

## 2. テイトの『万能薬』

ネイハム・テイトの『万能薬、茶に関する詩』は 1700 年に出版された際には、 (14) 枢密院のメンバーであったチャールズ・モンタギューへの献辞、序文、2 名の詩人 (R.B. と T.W.) による献詩、序詩、2 巻からなる本文、「茶卓」と題された短詩、後記という複雑な構成を取っていた。さらに 1702 年の第 2 版では題名から「万能薬」という文字が消え、献辞が削られた代わりに、批評家を揶揄する序文が増補され、ペクリンやオーヴィントンの記述に倣った「茶の性質と効能に関する報告」と題された茶論が新たに巻末に加えられた。 (15) 本論では 1700 年版をテキストに選ぶが、「報告」についても後に触れる。

テイトは作品の前に置いた序詩で、政治家、弁護士、医者、科学者、学者、音楽家、画家、詩人といった職業に就いている読者に向けて、茶のさまざまな効用を歌い上げる。たとえば飲茶によって思慮が触発され、雄弁が促され、疾病の予防と治癒に役立ち、

靈感が与えられるという具合である。冒頭でテイトは「名声よ、ラッパを響かせよ、全階層の人々が呼ぶ、万人を豊かにする貴重なものを分かたために」(II. 1-2) と言うが、ここに挙げられている職業人を「万人」と称するにはいささか無理がある。すでに触れたように、当時は富裕な者しか茶を購うことはできなかったからだ。

『万能薬』の第 1 巻は、テイトが序文で「風変わりにも思えるかもしれないが、中国の歴史に取材した」と述べているように、中国で茶が誕生するまでを物語る。語り手はエイヴォン川の畔に住む羊飼いのパラエモンである。彼は中国から帰って来たばかりで、仲間の羊飼いたちを招いて東洋の珍奇な品々を披露し、茶碗に注いだ「緑色をした香しい茶」(I. 28) をふるまう。すっかり茶に魅惑された客たちに、パラエモンは茶が生まれるに至った物語とその効能を語り始める。

古代の中国で「かの種族の最後の者、邪悪な王たちの最初の者」(I. 75) と称される「キ」が暴政をふるっていた。国中の賢者を追放して、未熟な若者を要職に就けた結果、「道化どもが帝国の政務を議論し、愚者どもが国家の相談役となった」(II. 84-5) のである。宮廷で王にへつらう者たちが寵臣となり、「享楽のグロットや淫らなあずまやに籠る」(I. 91) ばかりか「香水の中を駆け回り、葡萄酒の池で水浴する」(I. 93) という有様だ。

宮廷の墮落はやがて国中に伝染し、古来の規律は失われて、怠惰や貧困、欺瞞や略奪が続いた。見かねた筆頭大臣は王を諫めるが、王は投槍で彼の首を貫いてしまう。なおも国を愛する者たちが次々と王を諫言するが、いずれも血の海に倒れる。いきり立った王は自分を譴責しようとする者に向かって「汝の息子たちはすみやかに処刑に導かれ、汝の妻や娘は最下層の奴隷と結婚するのだ」(II. 152-3) と言い放つ。

王が星々を眺めながら、自分たちの命が永遠には続かないことを嘆くと、寵姫アマラは死なねばならぬことは忘れ、快樂に命を委ねましようかと答える。かくして王は勅令を発する。

宮殿を建造せよ（太陽よりももっと明るく）  
 陽光からは閉ざし、だが消えることのない  
 ランプと細蠟燭のもっと輝かしい光で飾り、  
 きらめく宝石にその光輝を反射させよ。  
 我らはそこで人間の無常さを説き聞かせる  
 季節の変化を目にすることもない。  
 悲しみはその幸福な王宮から閉め出され、  
 快樂だけがそこに入ることを許されるのだ。

(II. 188-95)

莫大な出費で建造した宮殿で君主が快樂に耽る間、一人の暴君を失った各々の地方では、無数の暴君が次々と出現するさまを眺めるしかない。田園では耕作が放棄され、都会では交易が衰退し、寺社が略奪される現状を見て、太守たちは反乱を起こす。

やがて彼らの軍勢は最高司令官の命令で立つが、  
 命令もなしに攻撃する術を知らなかった。  
 恥辱と怒り、軽蔑と驚きに挟まれるように、  
 彼らは物言わぬ表情でお互いを見つめた。  
 敵対する派は彼らが武器を振るわず、防御し  
 かないのを見て、宙ぶらりんのごとく立ちすくむ。  
 やがて両軍は公共の福利のために手を組み、  
 敵として遭遇したが、友人として結びつく。

(II. 230-7)

ついに一つになった革命軍は王宮へ押し寄せ、王はアマラとともに夜の闇へ逃亡する。王族はすべて絶え、高級官僚たちは最初に王の犠牲となった筆頭大臣の息子を新たな君主として選び出す。

エリスらは「キ」のモデルが夏王朝の最後を飾る「桀王」であり、テイトが第 1 巻の物語を紡ぐ上で参考にしたのは、ルイ・ル・コントの『中国帝国を先頃旅行した間になされた回想と観察』であると指摘する。(16)

フランスのイエズス会士で布教の使命を帯びて中国に数年間滞在したコントの記述によれば、3580 年前に中国を支配していた王「キ」は、英傑となるべき資質を天から与えられていたが、女性への欲望と放蕩の精神によって矮小化されてしまい、愛姫を

追悼するために貴石の塔を建て、淫らな行為の後に自分と 3000 人の若者が水浴するために池を葡萄酒で満たすなどの乱行を重ねた。

見かねた宮廷の賢者が王に忠告したが、王は彼に死を与えた。ある日「キ」は輝くことを止めない星々を眺めながら、自分と寵姫たちの寿命が短いことを嘆いた。すると愚かな王妃は太陽や月や星を見ないように、壮麗な宮殿を建造して外光を一切遮断し、代わりにランタンを昼も夜も灯すように訴える。王はこれを聞き入れ、宮殿に引き籠って快楽に耽ったが、ついに民は王族の一人を担いで反乱を起こす。王は軍を率いて反乱を鎮めようとするが、人心がすっかり自分から離れたのを悟ると、退位して地方から地方へと放浪生活を送った。民は宮殿を破壊し、この不名誉な行為を後世に伝えるために、町のあちこちにランタンを掲げるようになり、これがランタン祭りの起源であるとされる。(17)

テイトの詩にはル・コントの記述をそのまま借用したと思われる箇所もあり、細部に違いはあるものの、エリスらの指摘は納得できる。ただし『万能薬』第1巻はまだ終わらない。茶の誕生については別の挿話が続くのである。新王の即位とともに中国は古来の形を取り戻したが、それまで知られることのない「消耗性疾患、水腫、苛む痛風と結石」(l. 262) が民を苦しめる。交易や耕作は回復せず、芸術や自然に逃避した病人たちは、芸術や自然もまた病んでいることを発見する。

新王は洞窟に住む孔子を訪ねるが、まわりの荒地にはかつて草木一本生えていなかった。しかし洞窟に近づいた一行は美しい緑の植物が芽吹いているさまを見て驚く。

そこには(名前は未知だったが)ソンプロ茶、インペリアル茶、病気を癒すボヒー茶が繁茂する。皆は思った、予言者の聖堂に敬意を表して、出自と同様に優れた効能を持って生まれ出で、民たちの悲しみに時宜を得た治癒をもたらし、やがて経験はその信念を確認するに至った。

(ll. 293-8)

孔子の聖堂のまわりに茶が芽吹いたという件は、ル・コントの記述には見当たらない。ただし彼の『中国帝国』の第5書簡(pp. 119-218)には孔子の生涯や思想について詳述されており、テイトはこれを参考にしたものと思われる。暴政によって荒廃した中国は、茶という優れた効能を備えた飲料の誕生によって復興を遂げるのであった。

ところでノヴァックは第1巻の物語を、英国における前世紀の終焉と新たな世紀の始まりと見なし、「政治的な寓意」すなわち「活力の復活と性的放縦からの撤退」と解釈する。その背景には「ホイッグ的な進歩詩想」がほめかされておられ、洗練された中国人のように茶を喫することが、18世紀の英国社会における「マナーの改革」につながっているという。(18) これを受けてエリスらは、第1巻の中国にまつわる物語を、乱痴気騒ぎや性的放縦に耽溺していたジェームズ2世が名誉革命(1688)によって退位させられたという出来事の寓意と説く。(19) 少々うがった解釈とも思えるが、テイトが暴君のご乱行を描くためにわざわざ古代中国の伝説に取材した理由も理解できよう。

第2巻でテイトは作品の舞台をローマの神々が集まる天の宮殿に移す。アポロが神々に茶をふるまうと、その芳香と美味に感嘆した神々は誰が茶の保護者になるかを競い合う。この弁論大会は一種の「競技詩」と関することができよう。テイトはさまざまな神々に茶の効用を語らせることで、茶の持つ大きな可能性を示しているのだ。

まずジュノーは「植物の女王」(l.25)たる茶には、神々の女王たる自分こそがふさわしいと主張する。次に学芸を司る女神ミネルヴァは、茶は学者に新鮮な着想をもたらす「大きな報酬」(l. 90)であり、詩人には靈感を与えるのだから、自分こそが適任者であると語る。続いて愛と美の女神ヴィーナスは、茶は「美の魅力を洗練するもの」(l. 141)であるから、茶は自分のものだと言及する。さらに貞節の女神シンシアは「貞節の聖なる飲料」(l. 171)は自分に捧げられるべきだと説く。海精テティスは自分の司る水が茶を育み、英国の栄光ある艦船は海を渡って茶を運ぶのだと説明して、「この新鮮な回復薬」(l. 238)

を自分に与えよと言う。

最後に健康の女神が、茶は下界の惨めな人間たちにとって「万能薬」(l. 280) であると断言すると、茶の保護者という称号は彼女に与えられることになる。しかしニンフに扮して紛れ込んでいた復讐の女神の一人アレクトが、かくも貴重な飲料を人間に差し出すことを惜しんで、女神たちの間に不和を吹き込むと、会議はいくつかの党派に分裂して喧々譁々の状態に陥る。そこに現われた眠りの神ソムヌスは、茶を飲むことで人間は自分が望むものを夢の中で見ることができるようになるとつぶやく。なおも女神たちの口喧嘩は留まるところを知らず、ついに主神が命を下す。

かくも多くの効能を誇る植物、あまりに豊かな賞品を独占させられぬと主神は判断した。すべての神の保護に値するものを一人の女神に割り当てることはできないと。かくして彼女らの願いを一度黙らせて、しかも女神たちの願いを容れてやって、神々が単独で要求するものを皆で認め、すぐさま名声のラッパを高く鳴らせと命じ、かの女神がその名を得た。

(ll. 327-35)

最終行の「かの女神」とは茶 (Tea) に引っかけたテア (Thea) を指す。テアあるいはティアは元来タイタン神族の女神だが、ここでは茶そのものが神格化されたと解釈すべきであろう。同時に茶はあらゆる女神の加護するものとなった。

第2巻は茶の持つ種々の効能を女神たちの主張に託して歌ったものだが、テイトはさらに1702年の第2版で「茶の性質と効能に関する報告」と題する小論を追加収録した。(20) その冒頭でテイトは「私が茶に関する詩を書こうと思ったのは、読者に気晴らしを与えるだけでなく、楽しみながらさらなる善へと進むためである。すなわち、詩歌の魅力によって、実に大きな恵みと利益をもっと一般人が利用することを勧めるためである」と述べている。

テイトは先に紹介したペクリンやオーヴィントン

の記述に倣って、茶の効用や種類などについて説明する。ただしオーヴィントンが、茶に砂糖を入れて飲むと効用は薄れるが、「肺と腎臓に益する」と述べているところを、テイトは「茶（特に緑茶）を飲む自然な方法は砂糖を入れないのが良く、甘くし過ぎると医薬的な効果はなくなってしまう」とささやかな修正を施している。

最後に改稿された1702年版の序文について触れておきたい。テイトは『万能薬』の初版が批判を受けたことをほのめかし、その理由が主題の選び方であったと述べる。批評家たちは作品自体こそ認めたものの、「茶葉はあまりにも些細なもので、詩神に認識されることもなかった」からである。ただしウェルギリウスは蜜蜂を、ヴィーダは蚕を、フラカストロヤトリウスも植物や雑草を主題にして詩を書いている。ことに後者の2人が選んだ主題は卑近なばかりか、あまり快いものとは言えないが、「詩歌の技巧、詩才の力強さによって洗練され、高尚なものになっている」とテイトは説く。さらにテイトはウェルギリウスが『農耕詩』第4巻で蜜蜂を歌った際に述べた「扱う題材は小さなものだが、栄光は小さくない」(l. 7) という文言を掲げて、自分の「主題の弱々しさ」は疑いようのない権威によって十分に擁護されていると主張する。

この件は、卑近な主題を英雄詩のような高遠な文体で書くという疑似英雄詩やバーレスクの詩法を語ったものと言ってよい。ブロイツヒは主に第2巻を念頭に置いて、「神々の競い合い」主題にした詩が疑似英雄詩に同化していく過程で、テイトの『万能薬』が重要な位置を占めていると論じる。(21) この作品は全般的に笑いを誘う要素を欠いているが、茶という些細なものの加護をめぐる神々が競い合うという設定は、内容と文体の齟齬を基本とする疑似英雄詩に通じることは確かだ。

### 3. モットーの『茶に関する詩』

次に取り上げるのはピーター・アンソニー・モットーの『茶に関する詩』(1712) である。彼はフランスのルーアンで生まれたユグノー教徒で、1685

年に英国に渡って劇や詩を次々と書いた。ドライデンは motto に宛てた書簡詩を「詩人のみならず舞台をも腐す、このような時代に書くことは、友よ、難儀だ」と始め、最後に彼を「実にすばらしい詩人で、実に良き友」(I. 55) であると称賛している。(22)

Motto は定期刊行物としては最初期(『タトラ』や『スペクテイター』よりも古い)のものとして『ジェントルマンズ・ジャーナル』を 1692 年に創刊したが、テイトも寄稿者の常連であった。(23) また motto はラブラーの『ガルガンチュアとパンタグリユエル』やセルヴァンテスの『ドン・キホーテ』を翻訳するなど、ヨーロッパ文学の紹介に尽力したことで知られる。

Motto はさらに 1705 年頃に貿易商に転身し、レドンホール通りに輸入雑貨などを商う店舗を開いた。(24) 『スペクテイター』288 号(1712)には motto の宣伝文が掲載されており、東洋の磁器や漆器、茶、扇、モスリン、絵画、アラック酒、綿織物、地図帳、絹織物、フランドルのレース、リンネルなどを扱っていると記されている。また第 552 号(1712)にも motto の店について「広い倉庫には茶、陶磁器、インド製品が山積みになって飾られて」おり、女性たちがレースやキャンブリック、モスリンやリンネルを選んでいと語られる。これは motto の友人であったスティールの筆になるもので、motto が『スペクテイター』に「紅茶の詩を献上してくれた」ことの見返りに書かれたとされる。(25)

モンタギュー夫人も都会風牧歌「金曜日、化粧室、リディア」で motto の店に触れている。(26)

インド洋品店や motto、王立取引所を巡ろう、  
背の高い甕が堂々と誇りを持って直立し、  
古雅な形をした中国の青磁で染まっている。  
奥では豊かなブロードが無頓着に広げられ、  
手前には磨き上げた金の飾り棚が輝いている。

(II. 28-32)

スティールが述べているように、motto は『茶に関する詩』(本文の前に掲げられた題名は『茶を称賛する詩』)を『スペクテイター』に捧げている。

その序文で motto は「かつて自分の生業としていた詩歌と同じように、交易を気晴らしにすることは困難」であり、茶に新たな税金が課されたために、備蓄が尽きた後は茶が高額にならざるを得ないと記している。つまり motto は商売に利するためにこの作品を書いたというわけである。

続けて motto は茶の効用について語る。茶は「老人の足を強くし、若者の頭脳を鎮め、飲んだくれの頭を冷やす一方で、素面の学者の頭を温める」ばかりか、「大食らいには消化不良の、政治家にはめまいの、厳しい医者には眠気の、才人には憂鬱の、淑女には気鬱の、伊達男には容色の」特効薬になるといふ。ただし motto の主張に目新しい点はなく、従来説かれてきた茶のさまざまな効用を繰り返しているに過ぎない。

『茶に関する詩』はワインやコーヒーと茶の対比から始まる。「ワインはくすぶる炎や曇った光を伴って、空想を危険な高みにまで焚きつける」(II. 9-10) ために、理性は嵐に巻き込まれ、真赤な大海原が目の前で逆巻くことになる。その一方で茶はワインやコーヒーに優ると詩人は歌う。

荒れ狂うワインから私は穏やかな茶に逃げる、  
海の嵐の後で、凧が我らを落ち着かせる。  
コーヒーが等しい効用を誇っても無益で、  
澄んだ流れは流れる泥を超越するのだ。  
茶はコーヒーから発する害悪を矯正し、  
その悪徳を否認して、その美德を分かっただ。

(II. 17-22)

このような詩行から motto が絶対禁酒主義者であったとヴァン・ローンは推測するが、その当否については定かではない。(27)

語り手は「わが主題、わが神酒、わが詩神」(I. 52) たる茶の助けを借りて、夢で神々の宴会を見る。すっかり酒が行きわたると、酒神バックスは荒々しく変貌する。神々の酌婦役を務める青春の女神へーベが恵み深い茶をふるまうと、神々は競うように茶を「見つめ、香りをかぎ、飲み、味を祝福する」(I. 60) が、バックスだけは茶を一口含んだだけで、

茶には強さがないから駄目だと喚き出し、ワインを飲めば自分もジョーヴになれるとのたまう。これに対してヘーベは、ワインは邪悪な香気で人間を征服するが、茶は節制と理性を行き渡らせ、健康をもたらすと反論し、医学の神アポロの賛意を求める。

ここからアポロの長々とした演説が始まる。茶は学者に判断力を、美女には美しさを与えるばかりか、精神を活気づけ、肉体を回復させ、あらゆる魅力を洗練するなど、かつて神々に賞賛されたオーク、葡萄、オリーブ、月桂樹にも優る。アポロはパエトーンが茶を飲んで落ち着いていたなら、太陽の戦車を見事に御して、主神の雷に打たれることもなかったであろうと語る。続いてアポロは茶の薬効について話す。茶は壊血病、尿詰まり、痛風、結石などに効く万能薬であり、老いを改善し、眠気を払い、長寿をもたらす。

いかにもパンフレットの詩行が続いた後に、アポロの演説は政治的な色彩を帯び始める。

葉はもはや東洋の国々に限定されず、  
ワインで失ったものを茶が救うのだ。  
もう一つの恵みが、欧州の害悪を終わらせる。  
茶と健康を自由と平和に加えるがいい。  
茶は人間においてあらゆる恵みを生かし、  
最大の善が与えることのできる健康を与える。  
その力を広め、ワインの過度を補い、  
あらゆる英国の美女に効能を試させよ。  
彼女らと同様に茶は魅力的、清浄、純潔、  
彼女らに茶を愛させ、味わうように説得せよ。

(II. 238-49)

善たる茶が悪たるワインを補完するものであるという主張は冒頭にも見られたが、ここでは茶が自由や平和と結びつけられている。テイトの作品と同様に、茶は名誉革命後の新たな治世にふさわしい飲料として位置づけられるのである。エリスらによれば、この詩の草稿では、スチュアート朝の混乱と闘争を経た後の、ウィリアム 3 世による平和と繁栄の回復が賞揚されているという。(28) ただし引用の後半は、英国の女性に飲茶を流行らせようとする商売人モッ

トーの宣伝文としか読めないことも確かだ。

さらにアポロは、海外との交易を重視するホイッグ的な予言をもって演説を締めくくる。

今や英国の艦隊は、季節とともに巡回し、  
フィーバスのごとく両半球を航海する。  
すべての大海原を英国の君主は支配し、  
中国の岸辺も液体の平野に縛られない。  
儉約する元老院は、時宜を得た運命によって  
服を着た英国からインドの機を閉め出すが、  
その製品は英国の荷として国外へ運ばれ、  
異国の宝物と交換して、英国の宝を増やす。  
アジアはヨーロッパ人が同意する間に、  
香料、真珠、ダイヤモンド、茶をもたらす。

(II. 250-9)

「インドの機」はインドから大量に輸入されていた綿生地キャラコを指すと思われるが、英国政府は国内産業を保護するために 1700 年と 1720 年にその輸入を禁じたが、国外への再輸出は認められたという。(29) 帝国主義の萌芽がすでにここに見られると考えてよい。

アポロの長演説が終わると、神々は喝采を送るが、バックスだけはなおも納得せずに押し黙る。しかし「葡萄に反対する宣告」(I. 264) が下されると、ついにバックスも強いられて茶を飲み干す。そしてジョーヴが「平和が戦争に続くように、茶はワインに続く。葡萄によって人間が不和に陥らぬように、神々の神酒たる茶を分配するがいい」(II. 267-9) と宣言して、この詩は終わりを迎える。

モットーの『茶に関する詩』は、テイトの先行作品(特に第 2 巻)を模倣したもので、ワインを擁護するバックスと茶を推奨するヘーベおよびアポロの論争が中心になっている。あまりにも図式的であり、作者の態度は初めから明確に茶に傾いていることは否めない。

#### 4. 『茶、3 巻からなる詩』

最後に取り上げるのは、読み人知らずの『茶、3巻からなる詩』(1743)である。前の2作に比べると時代も大きく変わり、茶が英国社会に広く行き渡るようになった後に書かれたものである。詩人は第1巻の冒頭で「優しい茶の甘美で抗い難い力」(l. 4)を歌うと主題を提示した後で、往時の英国を回顧する。

活発で、優雅で、上品で、洗練された光景に出くわすことのなかった昔日のことだ。

かの婦人たちは何と無様で育ちの悪いことか、  
服装はいかにも珍妙、食物はいかにも粗末。  
彼女らは太ったローストビーフを喜んで食らい、  
トーストとエールを朝食にする有様だった。

(ll. 59-64)

しかし英国に茶が到来すると、「トーストとエールの三倍も祝福された後釜」(l. 72)たる茶は、万人から歓迎されることになる。茶は憂鬱に悩む美女の心を魅惑し、危険な疾病を追放し、老人を若々しくするなどの薬効を持つが、これらはタイトやモットーが歌ったことと何ら変わらない。

この詩の新しさは、茶そのものの効用を強調するというよりも、むしろ茶を喫するための道具立てを描いている点にある。まず「茶の神聖な祭壇」(l. 145)たる茶卓は、円形をしているものが使いやすく、材質としてはマホガニーが推奨される。さらに表面の装飾には、インド風にして色彩豊かに人や鳥や花や樹木を描くのが最良だが、フランスの有名な絵師の図案を借りてもよい。ただし乳搾りをしている田舎娘や、昼に織った労作を夜に解くペネロピーはふさわしくない。詩人が推薦するのは、愛を主題にした牧歌風の図柄である。

花々を彼の寝椅子にして、テンニンカを彼の頭上にある緑の天蓋に広げるがいい。  
そして木蔭に隣接した岩場から、  
水が滝となって音を立てているように見せよ。  
疑似的な波が泡となって滝壺を包みこみ、  
流れにつれてゴボゴボ音を立てるように描け。

遠くには、女羊飼いの姿が見えていて、  
田園の神のごとくに緑色の服を着せよ。  
見よ、彼女の頬は清らかな真紅に輝き、  
チューリップやダマスク薔薇よりも美しい。  
花輪を彼女の象牙色の額に巻きつけよ、  
髪の毛は風に吹かれて流れるように。  
彼女の全身を安らかな美に支配させ、  
愛の苦悩を内気な尊大さと混ぜ合わせよ、  
彼女が若者を半ば無視するかのように。

(ll. 183-97)

続いて詩人はティーポットについて、中国の美しく透けるような磁器を、選り抜きの花模様で飾れと説く。受け皿も洗練された材質で作られ、大きすぎず小さすぎず中庸が肝心で、金で縁取りをして、萎れることのない花々で飾るべし。湯沸しは磨き上げられた銀器や最良の銅器がよい。嗅ぎ煙草を備えておくことも忘れてはならない。このような教訓的な調べで、詩人は茶器の選び方について指南を施すが、その目的は客間に親しい友人を招くために他ならない。だが日曜日のミサが終わった後に、友人たちを招いて開かれる茶会の様子はすこぶる退屈なものである。

第2巻は『髪の手略奪』を思わせる趣向で、「眠り」に空想を刺激された詩人は、シルフなど精霊の世界を描き始める。岩山に囲まれた森の中に立つ「茶の女神」(l. 43)の神殿では、「評判」が「醜聞」と姉の「高慢」に玉座を奪い取られて辱めを受けている。そこに降臨した「真理」は「評判」を助け出すが、「醜聞」は自分の舌から滲み出る毒を塗った矢で「評判」を射殺してしまう。

その影響を受けた地上界では、茶会の最中に男女入り乱れての騷擾が巻き起こる。

今や皆が残忍な悪意に満ちた怒りを吹き込まれ、  
（「醜聞」がそう命じたので）熱くなって交戦する。  
美女と美女が対抗して互いの衣服を中傷し、  
淑女と淑女が押し合い、伊達男と伊達男が敵対する。  
征服するか、死ぬか、みな覚悟を決めて、  
手袋、下げ緒、扇が飛び交うひどい混乱だ。



騒動は込み入って、今や皆は声高に衝突し、  
五分五分の戦争に激しく巻き込まれる。  
代わる代わる征服し、皆が勝利を主張し、  
名声を最も台無しにした者が勝ち誇る。

(ll. 156-65)

この騒擾を「無害な茶」(l. 187)の責任にはしてはならぬと言いながらも、混乱を避けた語り手はシルフに導かれて神殿に立ち戻る。そこでは茶の大臣や国家の相談役たちが熱い議論を交わしているが、何ら結論が出ることはない。

続いて美女たちの様子が次々と描かれる。愛犬ショックの死を悼むペリンダは「茶を啜りながら嘆息する」(l. 225)。イグナヴィアはティースプーンを弄びながら「六頭立て馬車を持たない」(l. 236)運命を嘆く。デジシリアは「茶を正しく理解せずに」(l. 247)フランドルのレースを求めて落ち込んでいる。クラリッサは「ボヒー茶が紹介された時代」(l. 256)すなわち自分の若かりし頃を懐かしむ。メリッサは退屈を紛らわせるために「冷めた茶をかき混ぜている」(l. 260)。飲茶と絡ませた美女のリストはまだ続くが、いずれも有閑階級に属する女性たちが、さまざまな欲望をかなえることができず、カードや仮面舞踏会や文芸に耽るものの、一向に満たされない心情を歌ったものである。

そこに降臨したのは「茶の守護神」(l. 321)たる女神で、従順な家来である「秘密の娘たち」(l. 333)がかしずいている。彼女たちは女神の威風を整え、祭儀や信者を点検するという役割を担っているのだが、しばしば女神を見捨てて「醜聞」に伺候してしまうのであった。どこが従順なのか分からないが、すでに見た通りに茶会は醜聞の宝庫であるということなのであろう。茶の女神が崇拜者たちに対して、自分の名声をもっとも広めた者に「四つ揃いの陶磁器」(l. 347)を授けようと喧伝した途端に、またもや熱い競争が始まる。

第3巻の冒頭で、茶の女神が懸賞として差し出した陶磁器セットは、「不和」によって破壊されてしまう。女神は皆に「不和」を捕らえて「彼らの怒りを茶の洪水で溺れさせよ」(l. 12)と命じると、自ら

は海神の助けを借りるべく岩山の頂へ飛ぶ。

茶の女神が海神に願ったのは、「私が大いに愛する茶を満載した英国の艦隊」(l. 50)が無事に公開できるように海を鎮めてくれというものだった。ネプチューンはこれに応じて、「朝日の昇る地域や国々」(l. 62)からヨーロッパに薫り高い茶を運ぶ特権を英国人に与えると約束する。さらに海神はフィーバスに、茶を育むために穏やかに降る驟雨をもたらせと命じる。

ここまで略述してきた作者不明の『茶、3巻からなる詩』は、何とも居心地の悪い作品である。茶にまつわる「評判」は「醜聞」に殺されてしまい、茶の女神が人間たちの争いを收拾できたかどうか不明なままであり、最後には海神に英国艦隊の航行の安全を保障してもらうという結末である。ポンドはこの作品で茶という主題が最優先されていないと述べているが、まったくその通りである。(30)

本論で取り上げた3篇の詩は、飲茶の効用を説くために古代中国の伝承やローマ神話の枠組を借りているが、本質的には対外貿易を推進するホイッグ的な姿勢が顕著に見られる。また有閑階級の女性たちが飲茶と茶会に付随する噂や醜聞をいかに愛したかがうかがわれ、英国において茶にまつわる文化が発展していった様子を辿ることができるのであった。

## 注

- (1) Nahum Tate, *Panecaea: a Poem upon Tea: In Two Canto's* (London: J. Roberts, 1700), Elijah Fenton, *Cerealia: An Imitation of Milton* (London: Thomas Bennet, 1706), John Philips, *Cyder. A Poem. In Two Books* (London: Jacob Tonson, 1708), John Gay, *Wine. A Poem* (London: William Keble, 1708) ちなみにフェントンの『穀物酒』は長らくフィリップスの作品と考えられていた。
- (2) Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge: Harvard University Press, 1932) 239.
- (3) Andrew Carpenter, ed. *Verse in English from*

- Eighteenth -Century Ireland* (Cork: Cork University Press, 1998) 54.
- (4) Richard Terry, *Mock-Heroic from Butler to Cowper: An English Genre and Discourse* (Farnham: Ashgate, 1988) 85.
- (5) Peter Motteux, *A Poem upon Tea* (London: Jacob Tonson, 1712), Anonymous, *Tea, a Poem. In Three Cantos* (London: Aaron Ward, 1743)
- (6) *The Diary of Samuel Pepys*, ed. Henry B. Wheatley, 8 vols (London: G. Bell and Sons, 1920) 1: 231, 6: 376.
- (7) Thomas Garway (Garraway), "An Exact Description of the Growth, Quality, and Vertues of the Leaf TEE, alias TAY, Drawn up for Satisfaction of Persons of Quality, and the Good of the Nation in General," (London, 1664)  
<http://name.umdl.umich.edu/A42427.0001.001>
- (8) Edmund Waller, "Of Tea, commended by Her Majesty," *The Second Part of Mr Waller's Poems* (London: T. W., 1705) この小品の製作年代は不明だが、上記詩集の初版(1690)に初めて収められた。
- (9) The Tatler, ed. Donald F. Bond, 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1987) 1: 532.
- (10) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols(Oxford: Clarendon Press, 1965) 1: 44, 3: 207.
- (11) Markman Ellis, Richard Coulton, Matthew Mauger, *Empire of Tea: The Asian Leaf that Conquered the World* (London, Reaktion Books, 2015) 80. マークマン・エリス 他『紅茶の帝国：世界を征服したアジアの葉』腰朋彦 訳 ( 研究社 , 2019) 128. の指摘による。
- (12) *A Treatise on the inherent Qualities of the Tea-Herb: Being an Account of the Natural Virtues of the Bohea, Green, and Imperial Teas* (London: C. Corbett, 1750) 1-2. 「ケンブリッジの紳士」がペクリンの著作を中心に編纂したもの。
- (13) John Ovington, *An Essay upon the Nature and Qualities of Tea* (London: R. Roberts, 1699), 近藤治「イギリス人のインドへの旅—オーヴィングトンのスーラと訪問と喫茶擁護論」『旅の文化史—生きられたアジアの風景』追手門学院大学東洋文化研究会編 ( 駈々堂 , 1993) 143-62 に和訳が収められている。
- (14) フォクソンによれば、実際には1701年に出版されたとある。D. F. Foxon, *English Verse 1701-1750*, 2 vols (1975; Delaware: Oak Knoll Press, 2003) 1: 784.
- (15) Nahum Tate, *A Poem upon Tea* (London: F. Nutt, 1702)
- (16) *Empire of Tea*, 81., 『紅茶の帝国』130.
- (17) Louis Le Comte, *Memoirs and Observations typographical, physical, mathematical, mechanical, natural, civil, and ecclesiastical, made in a late Journey through the Empire of China* (London: Benj. Tooke, 1697) 169-172. この書ではページ数の表記に混乱が見られる。
- (18) Maximillian E. Novak, *Eighteenth-Century English Literature* (London: Macmillan, 1983) 14.
- (19) *Empire of Tea*, 82., 『紅茶の帝国』130.
- (20) Nahum Tate, "An Account of the nature and Virtues of Tea," *A Poem upon Tea* (London: F. Nutt, 1702) 37-45
- (21) Ulrich Broich, *The Eighteenth-Century Mock-Heroic Poem*, trans. David Henry Wilson (Cambridge: Cambridge University Press, 1990) 85.
- (22) John Dryden, "To my Friend, the Author [Peter Motteux]," *The Works of John Dryden (Poems 1697-1700)*, ed. Vinton A. Dearing (Berkeley: University of California Press, 2000) 7: 12-3.
- (23) Dorothy Foster, "The Earliest Precursor of Our Present -Day Monthly Miscellanies," *PMLA* 32 (1917) 22-58.
- (24) Robert Newton Cunningham, *Peter Anthony Motteux 1663-1718* (Oxford: Basil Blackwell, 1933) 182-3.
- (25) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 3: 25-6., 4: 478-9.
- (26) Lady Mary Wortley Montagu, "Friday, the Toilette," *Six Town Eclogues. With some other*

*Poems* (M. Cooper, 1747) この作品については拙著『葦笛の詩神—英国十八世紀の牧歌を読む』(国文社, 2017) 385-9. で論じた。

- (27) Henri van Laun, "Biographical Notice of Peter Anthony Motteux," *The History of Don Quixote of la Mancha*, trans. Motteux, 4 vols (London: Nimmo & Rain, 1880) 1: xl.
- (28) *Empire of Tea*, 83., 『紅茶の帝国』 133-4. 草稿は大英図書館に1部だけ残っているという。
- (29) 浅田實 『東インド会社』 (講談社現代新書, 1989) 46-66.
- (30) Bond, 421.

本稿は科研費の基盤研究C「十八世紀英詩におけるバーレスクと民衆文化」(課題番号 18K00380) による成果である。